

# 形成期オデッサ素描

中村喜和

## 1 前史

二つのせまい海峡によって地中海につながる黒海は、古代からギリシャ人の海であった。ドニエプル河やドン河の流域のステップでスキタイ人が遊牧生活を送っていたころ、黒海の南岸にはティエウム、シノペ、トラペゾス、北岸にはドン河の河口にタナイス、クリミア半島にフェオドシアとヘルソネソス、ドニエストルの河口にオフィウサ、西岸にはオデソスやアポロニアなど合わせて20を超すイオニアの植民地が散在していた。ずっとくだって紀元後988年に東スラヴ族のいわゆるキーエフ国家がキリスト教を受容したころにも、ヘルソネソスは依然としてギリシャ人の町であり、ギリシャ正教の主教座がここに置かれていた。ロシア年代記にコールスニの名であられる町がそれである。

その後十字軍の時代からイタリア人が黒海にも姿をみせるようになった。13世紀の後半にはジェノアの商人たちがクリミアのカーファ（かつてのフェオドシア）やアゾフ海にそそぐドン左岸のタナ（かつてのタナイスの近く）に居留地をつくっていたことが知られる。当時この地方は、ステップの北のロシア全土同様、はるかアジアから西征してきたモンゴル人の支配下にあった。ロシア人は彼らをタタールと呼んだ。ほどなくヴェネツィアの商人たちも黒海に進出した。15世紀の後半にモスクワをおとずれて興味ぶかい記録をのこしたヨサファト・バルバロとアンブロジーオ・コンタリーニは、ともにヴェ

ネツィア人であった。

2世紀半にわたって〈タタールのくびき〉のもとにあえいだロシア人はモスクワを中心に統一国家を形成し、1480年に金帳汗国への進貢を廃して独立をかちとるが、16世紀前半にはその勢力範囲の南限はまだドンの上流にとどまっていた。現在のウクライナと白ロシアの大部分はリトワニア領であり、黒海北岸のステップに住むタタール人は強大なクリミア汗国を形成していた。イワン雷帝は1552年にカザン汗国をたおしてカスピ海にいたるヴォルガ水路を手中に収めたが（彼の治世下にシベリアへの進出もはじまる）、南と西に向かってはほとんど版図を拡大することができなかった。そればかりか、1571年にはクリミア汗のデヴレット・ギレイが大軍をひきいてロシアに侵入し、モスクワを焼討ちした。17世紀になってもロシアにとって最大の脅威はステップであった。モスクワの守備隊は常にクレムリンの南側に配備されていたし、ロマノフ王朝の初期のツァーリたちがクリミア・タタールに対していかに屈辱的な外交政策を強いられたかは、オレアリウスなど当時のヨーロッパ人の旅行記によって知ることができる。

17世紀の前半だけで、15万から20万のロシア人が捕虜としてクリミアへ連れ去られたといわれる。タタール騎馬隊の侵入を防ぐために、万里の長城を思わせるような防衛線が幾重にもわたって南の辺境の森林地帯に張られた。場所によって大木を倒したり、逆茂木を並べたり、柵をつくったり、また土塁をきざいたりして、人

馬の通行を遮断したのである。その最も長大なものは、ウクライナからベルゴロド、ヴォローネシを経てヴォルガ右岸のシンピールスクまでえんえん 1200 キロに及んだ。

ロシアとクリミア汗国の力関係が完全に逆転するのは18世紀になってからである。ピョートル一世が政権を握ってまもなく敢行したアゾフ遠征（1696年）はほとんど実質的な戦果をあげることができなかったが、ピョートルの西欧化政策が一応実をむすんでからロシア帝国はクリミア汗国やその背後のオスマン・トルコと間断なく戦争を行ないながら、次第に領土を南にひろげていく。まず1730年代にはベルグラード講和条約によってドン河の河口一帯とドニエプル下流のザポロージェ地方がロシア領に編入される。とりわけエカテリーナ二世（在位1762-96）の時代には、いわゆるポーランド分割で知られるように、ロシアの国境はいちじるしく西に移動したが、同時に南下政策も強力に推進されてロシアの領土はついに黒海に達した。1774年のクチュク・カイナルジ条約はドニエプルの河口地方をロシアにもたらし、1783年にはクリミア汗国が最終的にロシアに併合されて、この半島の全体とその後背地、ならびにアゾフ海東岸がロシア領となった。さらに1791年のヤス条約によってユーヅヌイ・ブークとドニエストルの二つの河にはさまれた地方がロシアに帰属することになった。この地域の一角にやがてオデッサが建設される。

ちなみに18世紀にロシアの所有に帰した黒海北岸はノヴォロシア、すなわち新しいロシアと総称されるが、その広さは20万平方キロをはるかに上まわり、オランダの6倍強、英国の全面積に匹敵する。

## 2 誕生

厳密に言えば、ロシアとトルコの戦いはすでに17世紀の70年代からはじまっていて、それ以

後徐々に戦場を南に移しながら、ちょうど200年間つづいた。1787年から91年にかけての戦争の最中、スヴォーロフ將軍を総司令官とするロシア軍がドニエプルの河口から120キロほど西寄りの黒海沿岸でハジベイと呼ばれるタタール人集落を占領した。1789年9月のことである。正規軍ではリバス將軍が、ウクライナ・コサックではそれぞれゴロヴァートゥイ（頭でっかち）とチェピーガ（犁の柄）の異名をもつ二人のアタマンがこのときの戦場で勲功があった。

キーエフ・ロシアの時代このあたり一帯に東スラヴのティヴェルツィ族とウーリチ族が住んだと《原初年代記》は述べているが、彼らはチュルク系の遊牧民に追われて北に移住したらしい。ハジベイあるいはカチベイの名は15世紀にはじめて文献にあらわれる。名目的にはリトワニア領であったとはいえ、実質的には当時からトルコがここまで勢力をのばしていた。1764年にトルコ人はここにエニ・ドゥニヤ（新世界）という名の要塞をきずいたが、それから30年足らずしてこの要塞がロシア軍の手におちたわけである。

ヤス条約でドニエストルまでの領有権を確立したロシアにとって、最も緊急の課題はいかにしてこの地方をトルコ軍の手から守りとおすかということであった。1793年には防衛策の一環として、旧ハジベイの砦のそばに、堀と土塁にかこまれた要塞がきずかれた。前述のリバス將軍と有能な技師フランツ・デヴォランがその指揮にあたった。もちろん彼らの献策にもとづいてであろうが、その翌年の1794年にはここに軍港と商港を建設するむねのエカテリーナの勅令が出されて、その年のうちに起工された。ドニエプル河口寄りのオチャコフも候補にのぼっていたが、結局リバスとデヴォランの意見がとおって、ハジベイが選ばれた。

従来のトルコ風の名前に代わってオデッサと命名されるのは1795年である。古典古代にギリ

シャの植民地オデッソスが黒海西岸にあったことは初めに書いたとおりであるが、当時のロシア人はハジベイをその後身と思こんでいたらしい（現代オデッサの郷土史家の意見）。本当は今のブルガリアのヴェルナがかつてのオデッソスの所在地である。これに対して、黒海には西岸と北岸の2箇所におデッソスなる植民ポリスが存在したという説もあるが、確実な根拠はないようである。オデッソスの名がもともと叙事詩の英雄オデュッセウスにちなんでいることは明らかである。エカテリーナの宮廷では、フランスの影響をうけて古典主義が流行していた。詩人や作家たちも何かといえばギリシャ風・ローマ風の名前をもつ主人公を作品に登場させる時代でもあった。当時ハジベイに駐屯して港町の建設工事に従事していたのがリバス將軍麾下のギリシャ人部隊であったという事実も、あるいはこの命名にあずかって力があつたかもしれない。

オデッサの港づくりは急速度ですすめられた。1794年のうちに、のちカラチン（検疫）と呼ばれる大波止場、造船所、2つの棧橋が完成していた。1796年までには、200万プード（1プードは16.38kg）の塩を格納できる倉庫（クリミアで塩が採掘された）、税関、取引所、ホテル、それに兵舎と武器庫などがつくられた。大寺院教会や病院の建築もはじまっていた。

この新開地では人間をあつめることが先決問題であった。元来が人のまばらなステップ地帯である。18世紀末のノヴォロシア全体の人口は83万5000人であつたというから、1平方キロあたりの人口密度は5人にも達しなかつた。砂漠なみと考へても差支えあるまい。リバスはペテルブルクの政府の許可を得て、この町への移住者には10年間の租税免除を約束し、家屋の建築に対しては土地の無償貸与と国庫からの資金貸出しの恩典を与えた。軍港を兼ねる町の性格上、宗教を同じくするギリシャ人の移民をと

くに歓迎したので、トルコ支配下のエーゲ海の島々から渡ってくる者が多かつた。ロシア人の中には近隣諸県からの出稼ぎ農民もいたが、かなりの部分は逃亡農奴であつた。むろん農奴の逃亡は法的には非合法であつたが、当局もこのさいは軍事上の必要のまゝに目をつむらざるを得なかつた。

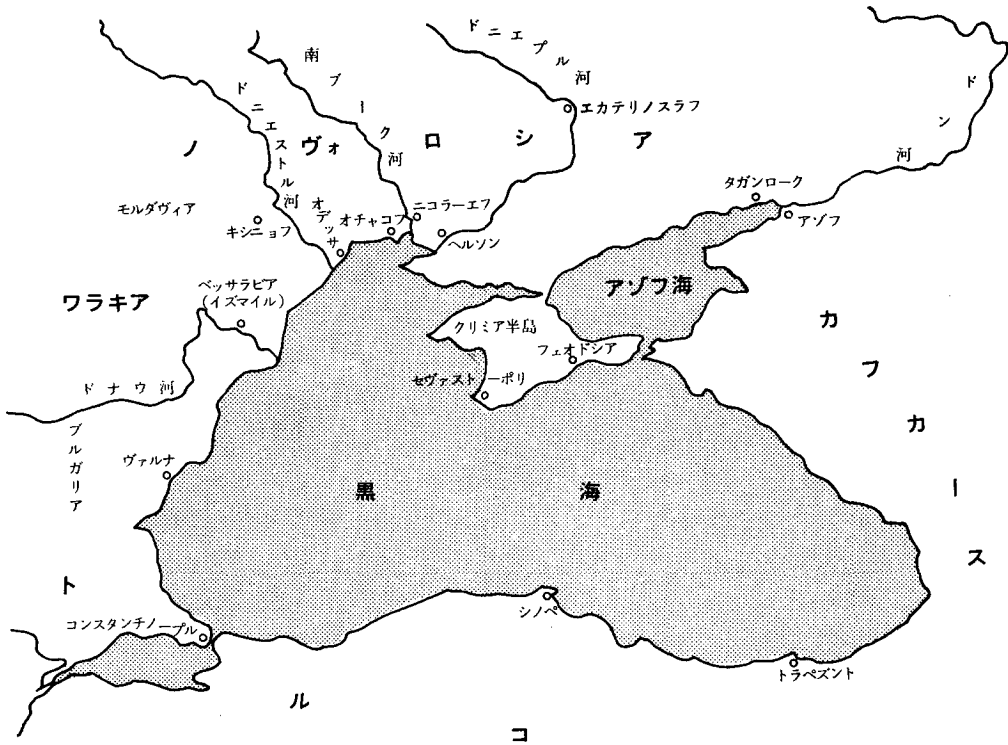
1795年にはロシアの諸都市並みに、民政と裁判を司る市会が発足し、6人の長老が選ばれた。1797年の男子人口は3455人をかぞえ、その内訳はロシア軍に勤務するギリシャ人が337、その他のギリシャ人269、ブルガリア人33、黒海コサック404となつていた。貿易に従事する商人は1798年の調査では80人であつたが、うち14人は外国人で、その出身地はフランス、オーストリア、ナポリ、ジェノア、コンスタンチノーブル、トリポリ、エーゲ海の島々など多岐にわたつていた。

肝心の港としての機能では、1796年に早くも86隻の船がオデッサ港にはいった。その国籍別内訳はトルコ船49、ロシア船34、オーストリア船3である。オデッサから輸出される商品は穀物、鉄、麻、綱索類、皮革、羊毛、魚、キャビア、獣脂で、逆に輸入される商品は織物、ワイン、乾果実、香料、タバコなどであつた。

オデッサは開港3年目にして、アゾフ海のタガンロックに次ぐ黒海第二の港にのしあがつたが、翌1797年にいたつてその洋々たる前途が一挙に暗雲におおわれるような事態が生じた。エカテリーナ二世の後を継いだパーヴェル一世の命令でリバス將軍がペテルブルグに召還されたのである。

啓蒙君主として名をはせたエカテリーナや、彼女の寵をうけたポチョムキン、ズーボフなどの側近は、いわば企業心に富んだ政治家であつた。エカテリーナはノヴォロシアの総督に初めポチョムキンを、ついでズーボフを任命するとともに彼らに広大な領地を下賜したが、それは

黒海要図（1800年前後）



彼女がこの地方の開発にいかにか熱意をいだいていたかを示している。領土は私的なものだったとはいえ、権臣たちはトルコとの戦争に勝つという国家的利益のためにそれぞれの領地の植民と経営の義務を負わされたようなものであった。ところがパーヴェルはあらゆる点で母親と反対の政策をとったことで知られる。ステップの開墾とか貿易の振興などという俗事は彼の関心の埒外にあった。マルタ騎士団につよい憧憬をいだき、1798年にはその70代目の団長に選ばれたりした反面、ノボォロシヤの経営には全く興味を示さなかった。リバスを首都に呼び戻したのを手はじめに、オデッサへの各種の補助金を打ち切り、造船所や税関に対する特権も廃止してし

まった。オデッサの商人たちは3000個のオレンジを1500キロも北のペテルブルクまで運んで新帝に献上したが、何のききめもなかった。

ここでリバスとはいかなる人物であったか、簡単に述べておこう。彼の名を抜きにして、オデッサの誕生を語るができないからである。実は彼もまたエカテリーナ二世と同様に、ロシア人ではなかった。生まれたときにつけられた名前はドン・ホセ・デ・リバス、国籍からいえばスペイン人で、父はバルセロナの貴族、母はアイルランドのやはり貴族の娘である。1749年にナポリで生まれた。父親がシシリー王国の軍事顧問としてナポリに住んでいたのである。16歳から20歳まで自らも士官としてナポリで勤務

していたが、1769年母の領地を検分するためにアイルランドに旅立った。その途中リヴォルノでロシア地中海艦隊司令長官アレクセイ・オルロフ伯爵と出逢ったことが彼の生涯を思いがけない方向に変える転機になった。このオルロフはエカテリーナ二世の寵臣のひとりグリゴリーの弟である。ちょうどこの1769年から、歴史上ではじめてロシアの艦隊がリヴォルノを母港として地中海を遊弋していた。折しも地中海ではヴェネツィア、トルコ、スペインの勢力が衰えて、N. ソールの表現を籍りれば、一種の〈真空状態〉が現出していた。ロシア艦隊の目的がトルコへの示威あるいは牽制であったことはいうまでもあるまい。

オルロフと知り合ったリバスはアイルランド行きをとりやめ、ロシア艦隊に身を投じた。このころロマノフ王朝の正統な皇位継承者と称してヨーロッパ中の宮廷から宮廷へと渡りあるいていたタラカーノヴァ王女の誘拐に加わったのが彼の初仕事である。1772年には正式にナポリ軍を退き、オルロフ伯爵の紹介状をもってペテルブルグにあらわれ、今度はロシア陸軍にはいった。その後ノヴォロシヤでのトルコ軍との戦闘に参加して手柄をたて、76年には中佐にすすみ、陸軍幼年学校長ベツキイの庶子アナスタシアと結婚した。1787年の第二次トルコ戦争(こう呼ばれるが実際は何回目かわからない)の勃発にさいしてはノヴォロシヤにあって、その後の海陸での戦闘にめざましい働きをした。89年のハジベイ襲撃のときには、沈没させたトルコの船をひき上げて、ロシア黒海潛艇艦隊を組織した。1790年には戦局の向背を決したイズマイル要塞占領に加わって著功があり、ポーロツクのモギリョフ県に農奴800人つきの領地を下賜された。翌年には陸軍少将兼黒海艦隊司令官の資格でヤス条約の締結に立ち合った。ラテン語、スペイン語、イタリア語のほかに、英、独、仏とロシア語に通じたリバスは、トルコ側との折

衝に手腕を発揮したばかりか、戦後のロシア軍の充実やノヴォロシヤの開発に力を尽くした。そして1793年に海軍中將に昇進し、のちにオデッサとなるハジベイ港の建設の全権をゆだねられたのであった。

生みおとしたばかりの町からパーヴェルによって引きはなされたリバスは、海軍省に閑職を与えられた。そして糧秣補給監督官に任ぜられたり、森林局長の職を経たりして(ピョートル一世以来、船舶材の確保を主要任務とする森林行政は海軍省の管轄であった)、1799年には海軍大將にあげられたものの、パーヴェルのおぼえは芳しいものではなかった。1800年12月、51歳で没。

リバスの死後20年ほどしてから、1801年のパーヴェル帝弑逆に彼が一枚かんでいたのではないかという噂が立った。この計画の首謀者と目されるパーニンとも、陰の演出者といわれたイギリス大使のウィトワースとも、リバスは非常に親しい仲であったので、この説が立てられたらしい。真偽のほどはむろん不明である。

リバスは1797年以後一度もオデッサに帰る機会がなかったが、町のほうは彼の名前を忘れたなかった。総督府の前をはしる最も古い目抜き通りにリバスの名がつけられ、革命後の今日までその名前(ロシア語ではデリバーソフスカヤ・ウーリツァ)が生きのこっている。

### 3 成長

パーヴェルの登極によってオデッサの発展は一頓座をきたすかに見えた。しかし商人たちの心配が杞憂におわり、逆にこの港町が19世紀のロシア都市の中で他に類をみないようなめざましい成長を示したのは、国際的な諸事情に負うところが大きかった。

リバスの後任には地味な性格のプストーキン海軍少將が任命され、リバス流の疾風怒涛の拡張政策に歯止めをかけられた形になったが、

南国のあたたかい陽光にめぐまれたオデッサの町は、いったん芽をふいた植物のように強靱な生命力を発揮する。幸いなことに、パーヴェルの後をおそったアレクサンドル一世もノヴォロシアの発展に父親のように冷淡ではなかった。

まずオデッサ港の荷扱量の躍進ぶりを数字で眺めてみよう。次に示すのはロシアの全貿易額に占める黒海の比重である。

1802年	5.5%
1803年	8.4%
1804年	10.7%
1805年	12.9%

アレクサンドル一世の新しい政策でオデッサがすべての外国船に開放された1802年には、黒海のロシア諸港の総輸出152万5671ルーブルのうちオデッサは全体の87.2%にあたる132万9776ルーブルを占めるという成績をあげ、タガンロークをはじめとする他の諸港を断然おさえていた。アゾフ海のタガンローク、ドニエプル河口のヘルソン、ドニエプル湾の奥のニコラーエフ、クリミア半島先端のセヴァストーポリ(当時からすでに軍港)のどの港と比べても、ボスフォラス海峡から最もアプローチが容易なオデッサが地理的に優位にあることはだれの目にも明らかであったが、ロシアとトルコの関係がヤス講和以後しばらく安定していたことが、オデッサのために有利にはたらいた。もっと大きなコンテクストでは、ナポレオンの台頭がひきおこしたヨーロッパの大動乱の渦がロシアとトルコの双方をひとしく巻きこんでいた。兵火のために西欧と中欧では穀物の生産が減少し、英国もまた1799年と1800年の2年にわたる不作に見舞われ、ウクライナの小麦に対する需要がいちじるしく増大していた。いわゆる春秋の筆法をもってすれば、ナポレオンこそオデッサ市にとって最大の恩人であったといえなくもない。

オデッサ港にはいった船の数は1796年の86

隻、97年の72隻に対して、1803年の入港数は635隻であった。しかも、黒海の他のロシア諸港にはいった342隻と比較してオデッサ寄港船舶は大型船が多かった。念のためにこの年の海のロシア領諸港に碇をおろした計977隻の国籍別内訳は次のようになっていた。

トルコ	353隻(36.1%)
オーストリア	295隻(30.2%)
ロシア	225隻(23.0%)
イオニア共和国	37隻(3.8%)
フランス	22隻(2.1%)
英国	7隻(0.1%)
その他	38隻(0.4%)

それから2年後の1805年には666隻の遠洋船と496隻の近海船合計1162隻がオデッサに入港した。築港後10年のあいだにこれほど飛躍的な発展をとげたのも、国際的な要因に助けられたからこそである。

もっとも、オデッサの貿易取引自体はほとんど外国人の手ににぎられていた。1803年の資料によれば、オデッサにはフランス、イギリス、それにイタリア系とドイツ系の商館があった。商人の数で言えば、全部で16人の外国人商人(1798年より2人だけふえている)のうち、ギリシャ人、イタリア人、ドイツ人だけで13人をかぞえた。輸出額の大半を占める穀物の扱いは外国の大商人、とくにイタリア人、ギリシャ人、クロアチア人ににぎられていた。ロシア自体の資本主義が未発達で商人階級に人材がとぼしかったこともあるが、オデッサ港の地理的条件、その取扱商品の性格がこのような結果をもたらしたものと考えられる。

外国人の中でもギリシャ人は特別な地位を与えられていた。ギリシャ自体はトルコ帝国領の一部でまだ独立国として存在はしていなかったが、上述のように、同じ東方正教会に属する信徒というよしみもあって、いちはやく1775年にはノヴォロシアに入植することをみとめられた。

同じころ北からはエカテリーナ二世が同国人のドイツ人を招いてノヴォロシアやヴォルガ河畔に入植させていた。後者がコロニストとして農場経営につとめたのに対して、ギリシャ人はどちらかといえば軍人や商人として身を立てる者が多かったようである。オデッサの町づくりにさいしてはリバス将軍が部下の将兵の中から300人あまりのギリシャ人部隊を編成してこれにあたったことはすでに述べたが、そのうち4分の1が病気と栄養不良で生命を失うという犠牲もはらった。リバスはギリシャ人のために新しい町の海岸に近い一角に居住区を設定した。トルコ、ロシアあるいはイオニア共和国の旗をかかげてオデッサに入港する船舶のうちかなりの部分は、ギリシャ人船主の所有になるものであった。ギリシャの独立運動で指導的な役割を果たす有名な〈友愛協会〉 *Φιλική Έταιρεία* も1804年（これはN. ソールの説。1814年とするものが多い）にはオデッサで成立していた。

ロシア人と同じスラヴ系のブルガリア人やセルビア人などもオデッサに多く、やはりトルコからの独立をめざす運動を行っていた。

国際状況から生じた好条件は別として、リバスとともにもう一人の外国人がオデッサ草創期の功労者として記憶されている。1803年から14年までは皇帝直属のオデッサ長官、1805年以後はさらに全ノヴォロシア総督を兼ねたアルマン＝エマニュエル・リシュリュエ公爵がその人である。彼はルイ十三世に仕えた大リシュリュエの血をひいて1766年パリ（一説ではボルドー）で生まれた。宮廷にはいってルイ十六世の王妃づきの竜騎兵連隊の士官に任じられたが、1790年エカテリーナの招きでロシアにおもむき、ポチョムキン部隊の一員としてイズマイル攻略戦に参加した。その後いったん帰国したが、革命が起こって国王が逮捕されるや、国民議会の許可を求めてふたたびロシアへやって来て、皇帝の庇護のもとで軍隊に勤務する。しかし例に

よってパーヴェルとは折合いが悪く、一時フランスに帰ったりウィーンに住んだりするうち、アレクサンドルが即位するに及んで皇帝じきじきの招請でまたもベテルブルグにあらわれる。謁見の席上アレクサンドルから1万ルーブルを下賜されたうえ、バルト海沿岸に年収2万4000ルーブルの領地を与えられた。これほどの殊遇をうけた人物がオデッサの長官に任命されたところをみると、アレクサンドルも祖母と同じようにノヴォロシアをかなり重要視したとみて間違いのないであろう。リシュリュエもよく彼の期待にこたえた。ショーヴィニズムで知られるソビエトの歴史百科辞典ですら、彼がこの職にあって〈すぐれた行政官〉として才能を発揮したことを率直にみとめているほどである。

リシュリュエはオデッサに着任すると、まず輸出穀物に対する特別課税を一律に1チェトヴェルチあたり2.5コペイカと定め（この税率は1812年のペスト後は5コペイカに引き上げられる）、その年間収入1万2000ルーブル（1チェトヴェルチは約1.17石であるので、この年の輸出量は約56万石になる。これを重量に換算すると5ないし6万トンに相当する）に加うるに皇帝からの貸与金20万ルーブルをもって、港湾施設の整備を精力的にすすめた。黒海・アゾフ海の諸港からの近海船舶用と、検疫を要する外国船舶用に二つの港がつけられ、高い壁で仕切られた検疫設備がもうけられるのもこのときである。リシュリュエはパーヴェルが独特の宗教的信念にもとづいて廃止したギリシャ人居住区も復活させ、外国人の移住を奨励したので、ギリシャのみならずブルガリア、モルダヴィア、セルビア、アルバニアなどから渡来する者がますます多くなった。リバスのひそみにならって、2年以内に家屋を建てる者には無償で市内の土地を与え、その家屋を抵当に入れさえすれば建築資金も貸し出すという施策もとった。リシュリュエの発意で都市計画も策定され、多くの道

路がつくられた。町の中心部分は舗装され、ロシアの他の都市にさきかけて1811年には200個の街燈もつけられた。その照明には初め獣脂を用いたが、のち亜麻油に代えた。リシュリユーがとくに意を用いたのは、樹木のとほしい町の緑化で、自分自身の手で好んで植樹や剪定を行なったという。1809年からは劇場も開かれ、有名なアレクサンドル・シャホフスコイの農奴劇団が巡業してきた。

リシュリユーが貿易港としてのオデッサを発展させるためにペテルブルグの許可を得て行なった方策を列挙しておく。

- オデッサ税関を通過する輸出入商品に限り、関税を一般税率より4分の1だけ引き下げる。
- オデッサ港で陸揚げされ、そこからモルダヴィア、ワラキア、オーストリア、プンシャに仕向けられるトランジット貨物はすべて無税とする。
- 陸揚げしてからも買手のつかない輸入貨物は税関倉庫に18カ月まで無税で保管することをみとめる。

このほかりシュリユーは商業貸出し、手形割引、両替え、保険などの金融機関の充実にも努力した。

彼の力の及ばない領分もあった。ナポレオン時代の西欧列強の変転めまぐるしい国際関係、とりわけ黒海の咽喉を扼するトルコとの関係がそれで、1806年から12年までトルコと戦争状態がつづいたことはオデッサにとって有利な条件ではなかった。それに追い討ちをかけるように、ナポレオンがモスクワに攻め込む1812年の夏にはペストが町をおそった。この疫病のためにオデッサの人口の約5分の1にあたる4000人が死亡し（一説では3万6000人中の2660人が死んだ）、市内の医者もすべてたおれてしまった。全面的な交通遮断が46日間もつづき、警戒措置が完全に解除されるのは翌年の夏である。

しかし成長期の少年のように、オデッサが回

復するのも早かった。人口の点では1798年の5000人、1802年の9000人に対して、ペストの痛手にもかかわらず1813年にはすでに3万5000人をかぞえ、穀物輸出の面で見ると、1814年には早くも1805年の水準を凌駕して次の表のような著増ぶりをみせた（残念ながら積出した量を示す資料は手もとにない）。

1805年	570万ルーブル
1814年	700万 "
1815年	1400万 "
1816年	3700万 "
1817年	4200万 "

1810年代の後半にはオデッサは南ヨーロッパ最大の穀物供給基地になっていた。小麦を主体とする穀物輸出の激増が、オデッサの後背地であるウクライナにおける小麦播種面積の拡大をともなっていたことはいままでの世紀の60-70年代に鉄道が敷設されるまで、遠くはウクライナの北部から、小麦が無数の牛車によって運ばれてきた。ウクライナが名実ともにヨーロッパのパンかごとか穀倉と呼ばれるようになったのはこのとき以来である。

ナポレオンの没落後まもない1814年の秋、リシュリユーはオデッサを去ってフランスに帰った。1815年復辟したブルボン家のルイ十八世によって彼は閣僚に任命され、さらに同じ年のうちにタレイランの後をうけて首相の地位についた。1820年に公務を退き、22年に没。享年56歳。

オデッサ市は彼を記念して、1817年に開校した中学校（ノヴォロシア大学の前身）にリシュリユーの名を冠し、リバス通りとT字状にまじわる大通りをリシュリユー通りと名づけた。この名前もまだのこっている。1828年には、波止場から町への長い石段を登りきった半月形の広場に、彼の像が建立された。

#### 4 エピローグ

オデッサの形成期のスケッチとしては、以上



述べたところではほぼ事は足りていよう。リバスを生みの親とすれば、ブロックハウス＝エフロンの《新百科辞典》もいうように、リシュリュウは育ての親とみなすことができるからである。そこで以下はつけたりとして、その後のオデッサの成育過程をざっと略記しておく。

リシュリュウの後任にはやはりフランス人のランジェロン伯爵が任命された。凡庸な人物だったといわれるが、それでも1819年に30年間の期限つきでオデッサが念願の自由港に指定されたことが彼の在任中の業績として記憶されている。開港以来オデッサの輸出入の帳尻りはいちじるしい出超の連続であったが、この措置によって輸入が促進され、ロシア国内はむろんのこと、ポーランドやオーストリア、さらには奥カフカスを経てペルシャを最終仕向け地とする貨物もオデッサを通過するようになった。レールモントフの《タマーニ》（《現代の英雄》中の一編）に描かれる黒海名物の密輸も猖けつをきわめたという。なおランジェロンもオデッサ市内の通りに名前をのこした。

1823年に、今度はロシア人のミハイル・ヴォロンツォフ伯爵がオデッサをふくむノヴォロシア全域ならびにベッサラビアの総督になった。彼の支配はほぼ30年間つづいた。血筋の点では名門を誇る生粋のロシア人であったヴォロンツォフも、英国に駐在する大使の息子として1782年にロンドンに生まれ、教育は外国で受けた。帰国後対ナポレオン戦争に従軍して、数々の勲功をたてた。ナポレオン失墜後、1818年までフランスを占領したロシア軍司令官としてパリにとどまったので、リシュリュウ公と交際する機会があったにちがいない。

政治的立場はイギリス仕込みのリベラル派に与して、オデッサ市の商工業の振興、市街の整備、クリミアのブドウ酒醸造業の育成等々に実務家としての能力を発揮した。オデッサに農業協会を設立し、あわせてステップ地帯にお

ける牧畜業の発展にも貢献した。1849年で期限切れになるはずだったオデッサの自由港扱いを10年間延長させたのもヴォロンツォフの手腕であった。1844年にはノヴォロシア総督のままカフカス地方軍最高司令官の職を兼ねた。このときの彼の部下の中に、のちに作家となる若いトルストイがいた。〈当時のロシアの高官の中では珍しく教養が高く、虚栄心がつよかったものの、目下の者には愛想がよく、目上の者には優雅な態度で接する宮中式の人物〉というのが後年のトルストイのヴォロンツォフ評である（《ハジ・ムラート》）。ヴォロンツォフの努力だけに負ったわけでもあるまいが、1847年オデッサの小麦積出しは300万チェトヴェルチを超え、ロシアから輸出される小麦の37%がこの港を通過した。このときオデッサはヨーロッパ第一の小麦積出し港となった。56年に彼が死ぬと、オデッサとグルジアのチフリスに記念碑が建てられた。

能吏ヴォロンツォフの不運は、政府に楯つく不穏な詩を書いてペテルブルグを追放された若い詩人が彼の監督下にまぎれこんできたことだった。新総督が任地に到着したばかりの1823年の夏、詩人のアレクサンドル・プーシキンがこれまで住んでいたモルダヴィアのキシニョフから自発的にオデッサに移ってきて、ヴォロンツォフのもとに勤めはじめた。もっとも700ルーブルの年俸を得ながら仕事らしい仕事もせず劇場や金持ちのサロンに夜毎出入りするという暮らしだったので、ヴォロンツォフの気に入るはずがなかった。詩人という称号に敬意を示さぬ上司を皮肉って、プーシキンは痛烈な風刺詩を書く。その上24歳の蕩児は7歳年上の総督夫人に言い寄りさえた。1年後にヴォロンツォフはイナゴの被害調査に出張させて、プーシキンを厄介ばらいした。この事件のおかげでヴォロンツォフはのちのちまでプーシキンの愛読者（ということはほとんどすべてのロシア人を意

味する)から高慢で打算的な冷血漢として悪評を買うことになった。

実はプーシキンはここでもう一つのはげしい恋をした。相手はリズニッチという穀物商人の妻アマリアである。夫はダルマチア人、一方アマリアはフィレンツェ生まれのイタリア人とも、ユダヤ系のドイツ人とイタリア人の混血児ともいわれる。オデッサは人種のるつぼのような町だった。その町のたたずまいをプーシキンは《オネーギンの旅の断章》の中で次のようにうたっている。原文は響きのいい韻文であるが、直訳体の散文に直しておく。

わたしはそのとき、埃っぽいオデッサに住んでいた。そこでは空が明るく冴えわたり、豊かな商いの手がせわしげに白帆を揚げる。ここではすべてがヨーロッパの息吹きを伝え、物みなが南国の光にきらめき、活気にあふれ、色とりどりにかがやいている。黄金なイタリアの言葉がにぎやかな町角にひびき、その町角を誇らしげなスラヴ人、フランス人、イスパニア人、アルメニア人、ギリシャ人、ずんぐりとしたモルダヴィア人が行き交う。エジプトの大地の息子、元海賊のモール人アリの姿も見える。

リシュリュー街と平行して東西にはしる大通りが今も詩人の名をとって、プーシキンスカヤ・ウーリツァと名づけられている。

詩を引用したついでに、19世紀の初めに出版されたウクライナ民謡集からオデッサをうたったものを紹介しておく。

おいらはオデッサに住んでいる  
オデッサの町は住みいいぞ  
麦の袋なぞかつぎはしない  
地主の畑へも出ずにすむ  
人頭税も払わされない

鍬や鋤ともおさらばさ  
おいらは旦那と呼ばれてる。

この歌を文字どおりに逃亡農奴や出稼ぎ農民のオデッサ賛歌ととるのはナイーブに過ぎるであろう。オデッサであれどこであれ、下層の労働者の生活が左うちわだったはずがない。日々の肉体労働の辛さを酔でまぎらす酒場の歌かもしれないし、あるいはウクライナの村に帰った農奴が若い時分の町暮らしをなつかしんだ歌かもしれない。

ロシアの他の都市に比べてオデッサの大きな特徴は、貴族の力が比較的よわく、商業・金融・貿易・造船などの分野で商人、とくに外国商人が羽振りをかかせたことである。ロシア人の商人も皆無ではなかった。1819年のランジェロン総督の報告によると、彼らのほとんどは逃亡した国家農民であったという。19世紀のモスクワでも農民出身の商人の台頭は顕著な現象であったが、この場合の商人は自由農民あるいは身代金を支払って自由を獲得した農奴である。その違いの分だけ、首都から遠いオデッサは司法の網がなかったわけで、デカブリストをはじめとする反体制活動家もここではかなり自由に息をつけたらしい。オデッサを〈陰謀家の巣窟〉と呼んだニコライ一世の言葉がのこっている。フリー・メーソンのオデッサ支部は進歩的なことで知られ、ナロードニキやポリシュヴィキも数多くここから輩出した。1905年の戦艦ポチョムキンのはなはだしい反乱はエイゼンシュテインの映画であまりにも有名になった。第二次大戦中はドイツ軍に占領されたが、頑強な防衛戦と勇敢な地下活動をもとめられて、1965年〈英雄都市〉の称号を与えられた。

話は前後するが、1892年の調査によればオデッサの人口は34万をかぞえ、ペテルブルグ、モスクワに次ぐロシア第三の大都市に急成長していた。ペテルブルグは18世紀の初頭に、オデッ

サはその世紀の末に、ともに国土の辺境の海岸に明確な政策的意図をもってつくられた都市であったことは興味ぶかい。この年の人口の内訳は次のとおりであった。

総計	340,526人
(うち男)	178,443
(うち女)	162,083
ロシア人	188,082 (55.2%)
ユダヤ人	112,235 (33.0%)
ポーランド人	13,462 (4.0%)
ドイツ人	8,897 (2.6%)
ギリシャ人	5,272 (1.5%)
フランス人	1,129 (0.3%)
その他	11,449 (3.4%)

この数字でとくに注目されることは、ギリシャ人が形成期当時の比重を失っていて、代わりにユダヤ人の割合が非常に高くなっていることである。ロシア革命前後に開花したいわゆる〈オデッサ文化〉なるものはきわめてユダヤ的な色彩の濃いものであった。

ちなみに、1974年のオデッサ市の人口は98万1000人。新興の工業都市に抜かれて、現在ではソビエト中の大都市のベスト・テンには入らない。オデッサは今や壮年期を迎えているらしい。

### 参 考 文 献

本稿の執筆にさいしては、各種の百科辞書、人名辞典などのほか、おもに次の2点を参照した。

1. **Одесса. Очерк истории героя-города.** Одесса, 1956.
2. Saul, N. *Russia and the Mediterranean 1797-1807.* Chicago and London, 1970.

前者は愛国主義的偏見につらぬかれた市史であり、後者は18世紀末から19世紀初頭にかけてのロシアの地中海政策の展開を追求しつつ、オデッサの成立についてもふれている実証的なモ

ノグラフである。

書名は分かっているが入手が間に合わなかった文献のうち主要なものは次のとおり。言訳がましく弁解すれば、拙稿は十分な資料を利用することができなかったために、オデッサの市民生活の実態については省筆のほかなく、全体としてデッサンに終わらざるを得なかった。

1. Вольский, М. Очерк истории хлебной торговли новороссийского края с древнейших времен до 1852 года. Одесса, 1854.
2. Небольсин, Г. Статистические записки о внешней торговле России. СПб., 1835.
3. Одесса 1794-1894. Одесса, 1895.
4. Скальковский, А. Первое тридцатилетие истории города Одессы, 1793-1823. Одесса, 1857.

\* 本稿は昭和53・54年度科学研究費補助金(総合研究A, 研究代表者 竹内啓一, 課題「地中海地域における集落の形成と発達に関する比較研究」)による研究成果の一部である。